

開講科目名 Course	民事訴訟法研究 / Law of Civil Procedure
時間割コード Course Code	10970
開講所属 Course Offered by	法学研究科修士課程 /
開始年度・学期 Start Year・Semester	2021年度 / Academic Year 後期
曜限 Day, Period	水 / Wed 1
開講区分 semester offered	後期 / .
単位数 Credits	2.0
学年 Year	1,2,3,4
主担当教員 Main Instructor	張 瑞輝
科目区分 Course Group	企業関係法科目群
教室 Classroom	7 E 1 大講義室
講義形式 Lecture Style	講義科目
担当教員名 Instructor (担当教員所属名 Affiliation)	張 瑞輝 (法学部)
授業の目標	

<p>授業の概要</p>	<p><授業の目標> 実体法上の法律関係を的確に把握していることを前提として、その実体に適合する手続の流れと選択を為し得るように、手続の流れに沿って民事訴訟法の基本概念と基本構造を習得することを授業目的とする。そのうえ、民事訴訟法の重要問題（争点）について学説の生成過程と重要判例の変遷を自ら進んで整理し、通説の通説たる所以や判例の意義・射程などを正しく把握することを目指す。</p> <p><授業の概要> 本授業は、犬山キャンパス開講の科目である。 本授業の内容は、講義（１５回）のほか、判例評釈文（院生受講者一人につき一つの評釈文）の作成指導と完成提出、によって構成される。 なお、判例評釈文の作成指導と完成提出について、院生受講者は、教員と相談したうえ、担当したいテーマ（判例）を決め、教員が提供する確認事項・参考文献などを手がかりに評釈文を作成し、指定される期日までに完成させ、提出しなければならない。</p> <p><授業計画> 第１部 総論 第１回 民事訴訟法の世界への扉 第２部 訴訟の主体 第２回 裁判所 第３回 当事者 第３部 訴え 第４回 訴え 第５回 訴訟要件 第６回 訴訟物 第４部 訴訟の審理 第７回 審理における当事者の弁論活動と裁判所の役割 第８回 口頭弁論とその準備 第９回 証拠 第５部 訴訟の終了 第１０回 当事者の行為による訴訟の終了 第１１回 終局判決による訴訟の終了 第６部 複雑な訴訟形態 第１２回 複数請求訴訟 第１３回 多数当事者訴訟 第７部 上訴・再審 第１４回 上訴・再審 第８部 特別の手続 第１５回 略式訴訟手続</p> <p><質問への対応> オフィスアワー等。また相談により随時対応する。</p> <p><評価方法> 毎回の授業における取り組み状況、準備に基づく討論の成績、判例評釈文の完成度により総合的に考慮して評価する。</p>
評価方法	
教員の指導に従わない以外の事由による失格基準	
授業計画	
テキスト	プリントを配布する。
参考書	<p>（Ａ１）伊藤眞・山本和彦（編）『民事訴訟法の争点』（有斐閣、２００９年） （Ａ２）杉山悦子『民事訴訟法重要問題とその解法』（日本評論社、２０１４年） （Ａ３）高橋宏志・高田裕成・畑瑞穂（編）『民事訴訟法判例百選〔第５版〕』（有斐閣、２０１５年） （Ｂ１）和田吉弘『基礎からわかる民事訴訟法』（商事法務、２０１２年） （Ｂ２）高橋宏志『民事訴訟法概論』（有斐閣、２０１６年） （Ｂ３）上原敏夫・池田辰夫・山本和彦『民事訴訟法 第７版』（有斐閣、２０１７年） （Ｂ４）中野貞一郎・松浦馨・鈴木正裕『新民事訴訟法講義 第３版』（有斐閣、２０１８年） （Ｂ５）三木浩一・笠井正俊・垣内秀介・菱田雄郷『民事訴訟法（LEGAL QUEST） 第３版』（有斐閣、２０１８年）</p>

アクティブラーニング、ディスカッション、実習等	
アクティブラーニング、ディスカッション、実習等の内容	
実務経験のある担当教員による授業	
担当教員の実務経験を活かした授業の内容	
質問への対応方法	
フィードバックの方法	
予習・復習等、準備学習の内容及び時間	
使用言語	
SDGs 17の目標（1～10）	
SDGs 17の目標（11～17）	